ADL あがるスタンダード　介護動画マニュアル開発プロジェクト［第2回］

科学的プロセスに基づく介護へ 専門性深化に向けた職場改革を促進

▲「動画の活用は科学的介護の実践を後押しする」と語る、社会福祉法人敬和会高齢者生活支援施設けいわ荘の施設長・関紘太さん

属人化した介護の弊害を排し標準化を図ることをめざし、シムウェルマン株式会社がこのほどリリースした動画マニュアル「ADLあがるスタンダード」。現場の業務環境の改善に役立ち、人材定着・経営の安定化への効果も期待される。制作には3年をかけ、5つの社会福祉法人に協力を仰いだが、その一つ、社会福祉法人敬和会高齢者生活支援施設けいわ荘の施設長・関紘太さんに、科学的介護の実践におけるノウハウ面について、開発に当たった同社代表取締役の飯村芳樹さんが話を聞いた。

「属人的手法の継承」が生産性向上を阻んでいた!?

飯村●まずは、施設の特徴についてお話をいただけますか？

関●私の勤める特養は、従来型の特養に地域密着型のユニットケアの特養とショートステイ、通所介護、訪問介護が併設され、一体的に運営しています。同じ敷地内には軽費老人ホーム（ケアハウス）もあり、自立して生活できるお年寄りから重度の方までさまざまな方々が通い、生活する拠点になっています。

さらに、法人としては、別の拠点に単独型の通所介護、居宅介護支援事業所、地域包括支援センター、保育園があり、公益事業として初任者研修事業と、法人後見人事業を行っています。

飯村●今回は、ADLあがるスタンダードを生産性の向上に向けた取り組みに活用されたということですが、どのような動機づけがあったのでしょうか？　科学的介護の醸成に向けた取り組みとの関係についても教えてください。

関●生産性に関しては、2025年度からの処遇改善加算の要件を満たせないことが理由です。生産性向上推進体制加算を取得している場合には、「生産性向上（業務改善及び働く環境改善）のための取組」の要件を満たすものとするとされていますが、私たちの施設では、「利用者の安全並びに介護サービスの質の確保及び職員の負担軽減に資する方策を検討するための委員会の開催や必要な安全対策を講じたうえで、生産性向上ガイドラインに基づいた改善活動を継続的に行っていること」という内容を推し進めるのであれば、処遇改善加算の取得要件である生産性向上のための取り組みの⑰（業務改善活動の体制構築）や⑱（現場の課題の見える化）に取り組むのと同義だと考えました。

そこで、まずは⑰や⑱に取り組むこととして、「じっくりとあるべき介護の方向が定まってから、見守り機器の選定と導入を行えばいい」と考え、生産性向上推進体制加算は見送りました。

さらに、3年以上前から、科学的なプロセスにより導いた根拠に基づいて介入する介護手法に取り組んできました。ご利用者が通常の状態にある場合の「水分や食事の量、歩行や座位の状況、排泄の状態」などのうち、何がどのように変化した場合にADLや体調などの評価指標に影響を与えるのか、その後はどのような経過をたどるのかというデータを蓄積し、その傾向を読み取って、ほかの類似ケースにも当てはめながら、未然に状態の悪化を防いだり、安楽にお過ごしいただける介入の方法を定めるようにしてきました。そのため、ご利用者へ提供するサービスの質的な生産性が上がる素地が整ってきたように感じていました。

しかし、その半面、職員のなかでは、業務の多忙さが「属人的手法の継承」によって問題となっており、せっかくの理論や環境の構築をしても実践が進まないところに問題意識がありました。

〝あるべき標準化〟を全職員で共有して推進

飯村●属人的手法が継承されていた理由は何だったのでしょう？

関●私たちの施設が根拠となる介護手法などを定めず、個人の、または、現場の一部の職層に委ね続けてきたことが原因です。もちろん良い面も悪い面もありますが、継承する側は根拠や考え方までは引き継がず、表面的な作業に徹する傾向があったため、これを改善する必要がありました。まさに、間違った画一化がはびこり、あるべき標準化には至っていなかったのです。

特に、科学的介護は、皆が同じようにサービスを提供できる体制が整っていないと、拾っていくデータの背景が異なることで、価値のないデータになりかねません。何時に何をやるといった画一的な支援を別々の方法で行っているようでは、科学的介護の意味が薄れてしまいます。

また、海外人材の活用も進んできており、技術の裏付けとなる考え方や専門職としての意識を整えることが難しくなってきたこともありました。

係長や主任など指導監督にあたる職責の職員まではゴールを共有できても、通常はリーダーやサブリーダークラスが現場のタスクやTODOの方向性を導く必要があります。そのため、標準化を推し進めるには多忙な中間層が一般職員の育成をする土壌を整えてあげることが必要です。

ADLあがるスタンダードを活用するようになったのは、そうした背景があったからです。活用することにより「標準的な業務はこういうものだ」ということを示すことができ、さらに標準化と効率化が進むことで、科学的介護の実践の時間的資源を生み出すことにもつなげられました。それこそ、私たちのめざす「生産性の向上」であると確信しているところです。

飯村●とても参考になる貴重なお話をありがとうございました。

次回も、制作にご協力いただいた法人様からお話を伺います。

▲シムウェルマン株式会社
代表取締役の飯村芳樹さん

● 会社紹介
シムウェルマン株式会社
●東京都千代田区麹町3-5-2　BUREX 麹町
TEL 03-6272-6533
URL www.simwelman.com/

動画の詳細および
申し込みはこちら▶

● 施設紹介
社会福祉法人敬和会
高齢者生活支援施設 けいわ荘
●神奈川県厚木市下荻野2117-2
TEL 046-241-7771
URL k-keiwakai.com/info_koreisha/